

コミュニケーション障害

ーコミュニケーションの発達と

障害について、言語障害を中心にー

前 谷 麻 早

序章

1、テーマ設定の理由

卒業論文のテーマは障害児教育に関するものにした、という希望はゼミを選択した時点から持っていた。テーマを決めるとき、私はボランティア先で会った子どもを思い出した。出会った時はことばのなかった子だが、数か月後、話せるようになっていた。話のできなかった子が話せるようになった、ということは、一見当たり前のようではあるが、本当に当たり前のことであろうか。私はその子が話しているのを見てとても感動した。ことばの発達が「当たり前のこと」とは思えなかった。そして「言語」に興味を持ち、言語障害児について調べてみようと思ったが、なぜ言語が発達するのか、と考えると「だれかとコミュニケーションを取るため」であることに気付いた。私はコミュニケーション能力の発達とコミュニケーションの障害について調査・研究したいと思い、テーマを「コミュニケーション障害」とすることにした。

2、研究の目的

「コミュニケーション (communication)」ということとは「共通の、共通の (common)」という意味のラテン語からきている。コミュニケーションとは、共通のものをづくりだす営みだと言ってよいであろう。」(秦野他、1998、3頁)

では、コミュニケーション能力に障害を持つ子どもたちと「共通のもの」をつくりだすにはどうすればよいのか。(1) コミュニケーション障害は何が原因でどのようなものなのか。(2) コミュニケーションはどのように発達していくのか。(3) 子どもはコミュニケーション機能に障害を持つ子どもをどのように受け入れていくのか。以上の3点を中心に研究を進めていこうと思う。研究は文献調査とケーススタディー法とによって行う。ケーススタディーについては多摩市にある学童保育所の協力を得て行う予定である。

コミュニケーションの発達と障害についての理解と障害のある子どもとない子どもがどのように関係を作っていくのか、その上で大切なことは何かを調査し、研究することがこの研究の目的である。また、私は将来障害児教育に携わっていきたいと思っているので、この研究が私自身の将来に有益なものとなることをも期待している。

3、研究の概要

この論文は序章、終章を除き、全4章からなっている。

第1章では、障害の定義として、本文中たびたび登場する「コミュニケーション障害」と「言語障害」について定義、概説する。

第2章では、コミュニケーション能力の発達として、言語発達と情緒の発達について述べる。

第3章では、コミュニケーションのしくみとして、脳、聴覚、ことばそれぞれのほたらきとコミュニケーションの関係について述べる。

第4章では、ケーススタディーの記録として1999年2月から1999年11月迄の学童保育所での記録を中心に、特殊学級通級児と他の子どもたちの関係の作り方や、特殊学級通級児を他の子どもたちがどのように受け入れていくかなどについて観察、研究したところを記す。

終章では、これらの研究をもとに考察し、人間は生涯発達しつづけるものであり、障害を持つものであってもその発達が止まってしまっている訳ではない、という考えを明らかにし、障害のある・なしに関わらず、その子自身を受け入れていくことが大切であり、お互いの個性を認め合えたとき友だち関係が成立する、という観点をまとめた。

最後に、論文の執筆に当たり、多大なる協力をしてくださった皆様に心から御礼申し上げます。また、いつもご指導頂いている岩間浩教授はじめ、先生方に心から感謝し御礼申し上げます。最後の最後に発達について調べたことで、改めて、私を育ててくれた両親とこれまでお世話になった方々に深く尊敬の意を表し感謝いたします。「いつもありがとうございます」

第一章・障害の定義

1、コミュニケーション障害とは

茂木(1997、249～250頁)によると、コミュニケーション障害とは、「言語、聴覚、音声の障害によって個人のコミュニケーション能力が損なわれた状態。コミュニケーションにかかわる感覚運動的、精神的機能は多岐にわたるため、上の3つ以外の原因によっても出現する。言語障害と同義に使われているが、本来はより広い概念である」。

コミュニケーションを取るためには、まずコミュニケーションを取ろうとする対象を、コミュニケーションを取ろうとする対象として認知する能力が必要である。また、その対象とかわらうとする意欲が必要である。人と人とが関係を作るとき、これらには必要不可欠なものである。この二つがあって初めて、人(自分)は人(他者)と向かい合い、目を合わせるという「コミュニケーションのとれる態勢」を作れるのである。したがってコミュニケーション障害には人を人(他者)として認知することが難しい自閉症や、人とかわかることを拒む緘黙、一部のLD(学習障害)なども含まれることになる。コミュニケーションを取ろうとするとき、その中心は言語による。言語を受け取るためにはある程度の聴力や視力が必要となる。またその言語を理解する能力が必要である。言語を投げかけるためには、自分の考えを他者に伝えたいと思うことが必要である。そしてそれを言葉として表し、まとめる能力が必要となる。さらにそのまとめた言語を表出する能力も必要である。これらの必要な能力のうち一つでも欠けてしまうと言語活動に障害が表れる。これらのいわゆる言語障害もコミュニケーション障害に含まれる。

以上を合計して、コミュニケーション障害全体の出現率は地

域によって多少のばらつきはあるものの大体10%前後となっている。

次にコミュニケーションのおもな手段である言語について、その障害の概要を示そう。

2、言語障害とは

1-2-1 言語障害の定義

文部省（1973）では言語障害について以下のように定義している。

「その社会一般にとって、話の内容に注意がひかれると同じ程度に、あるいはそれ以上にことばそのものに注意がひかれてしまつような異常な話し方をする状態、及びそのために本人がひきめを感じたり、社会生活に不都合をきたしたりするような状態を言語障害という。」

「社会一般の人」とは地域について、その地方の人のことで、方言などはその地方一般の人びとと同じ話し方であり、日常のコミュニケーションに支障をきたさないかぎり言語障害とはいわない。

「ことばそのものに注意をひかれる」とは異常の程度や判別の基準を示すものである。その子どもの話し方とその子どもと同年代の子どもたちの話し方とを比較した場合、どの程度かけ離れているか、あるいは目立つかということ。また、その話し方は内容について注意がひかれるのと同じ程度か、それ以上に注意をひかれてしまう状態をいう。

「社会生活に不都合をきたす」とは、話し方を本人が不自由に

感じ、あるいは苦しんでいるために、どれだけ不安やフラストレーションを感じているか、また社会的適応状態が障害されている場合であることをいう。そして、将来その子どもの情緒や性格に悪い影響を与えるおそれのある場合も含められる。

1-2-2 言語の概念（略）

1-2-3 言語障害の種類

（中略）言語障害の中で最も多いのはことばの発達の遅れである言語発達遅滞、次いで音を正しく発音できない構音障害である。しかし身体の機能は複雑なため、原因がひとつとは言い切れない場合や、いくつかの障害が重複している場合も多い。

障害と障害の境界はあってないようなもので、ひとつの症状を見ただけではその障害を理解したり、判断したりすることはできない。同じ症状を見せていてもその原因や障害名が同じとは限らない。また、同じ障害名であってもその症状は個人差が非常に大きい。これは言語障害に限らず、どの障害についても言えることである。したがって、障害児教育においては、障害のない児童にする以上にひとりひとりの児童とじっくり向き合い、その児童の障害を理解した上で、その児童にあった指導方法をその児童とともに考えていく必要がある。そしてその児童のパーソナリティの理解に努めると同時にその児童の抱えている障害について深い知識を持ち、理解していくことが重要である。

1-2-4 言語障害の出現率（略）

第二章 コミュニケーション能力の発達（略）

1、言語の発達

2-1-1 言語獲得の基礎

2-1-2 初期コミュニケーション能力の発達

2-1-2 言語の発達

2、情緒の発達と障害

2-2-1 言語の使用と情緒の発達

2-2-2 外部からの刺激の取り入れ方

2-2-3 相手の気持ちを理解するための土台

2-2-4 社会的認知能力の発達

第三章 コミュニケーションのしくみ(略)

1、脳とコミュニケーション

3-1-1 優位脳と言語中枢

3-1-2 ことばを話すときの神経系の働き

3-1-3 脳損傷によって生じる言語障害

2、聴覚とコミュニケーション

3-2-1 耳の仕組みと聞こえ

3-2-2 聴覚障害と聞こえ

3、ことばの理解、表出とコミュニケーション

3-3-1 ことばの理解に必要な能力

3-3-2 ことばの表出に必要な能力

第四章 ケーススタディーの記録

1、ケーススタディーについて

4-1-1 ケーススタディー法を取った理由(略)

4-1-2 記録について

記録に際して、以下のことを断っておく。本文中に登場する児童の名前はすべて仮名(私が普段読んでいた名前)である。

これは児童のプライバシー保護のためである。ここでは学童保育所にお邪魔した日に毎日書いていた記録から、この研究に関係する箇所のみを扱うことにする。

主に観察した児童はタクちゃんという男の子で、1998年度小学1年生・99年度2年生の児童である。障害名は言語発達遅滞と多動で、程度は即ち中度である。家族構成は、父、母、姉(99年度小学4年生)、本人の4人である。学童保育所への入所は平成10年4月となっている。

4-1-3 学童保育所について(略)

2、ケーススタディーの記録

2月25日(木)

13時ごろ学童に着くと、1年生がもう帰ってきていた。ビーズで遊んでいる女の子たちの傍で、職員の大ちゃんとかっこ遊びをしている男の子がいる。どうやら彼がタクちゃんらしい。タクちゃんのごっこ遊びは彼の空想の世界を表に出したような感じだ。職員さんに台詞を言わせ、自分の言いたい台詞を言う。言いおえるとまた別の台詞を職員さんに言わせる、という繰り返しである。自分のシナリオを彼は自分で演じて満足している。しかし、タクちゃんが朗らかにしているのは、慣れている職員さんに対してのみで私には文字通り見向きもしなかった。タクちゃんの遊びがごっこ遊びから追いかけてことになる、大ちゃんか他の子どもたちをうまく引き込み、タクちゃんと他の

子どもたちとをかわらせていた。

1年生のミクちゃんが、タクちゃんは「わかくさ」だと教えてくれた。N小学校の特殊学級の名前らしい。「わかくさって何？」と聞くとミクちゃんは「うんね、ほかの子と違う子がいるの」と答えた。「他の子と違うってことは、すごく立派な子とかが行くのかな？」と言うと「違うよ。違うけど、うーん」と困ってしまった。子どもたちにとって障害児とは「みんなと違う子」であるらしい。しかし、特に特殊学級通級児童のように比較的障害の軽い子どもたちに対しては「みんなと違う」とは思っても、どこが違うのかは分からないようだ。周りのおとなが障害を持っている人に対してどのように接するか、子どもたちに「障害」をどう伝えるか、によって子どもたちが将来障害を持っている人をどうみるか、どう接するかが決まってしまうような気がする。子どもたちが将来、障害のある人も、ない人も、同じ生きているものとして尊重できる人になってくれることを祈る。また、そのためにおとなとしてどのような態度でいるべきかを、いつも考えていようと思った。

3月3日（水）

おやつの桜餅用のこしあんを丸めていると、2年生のユッコとユイが「何してるの？」と寄ってきたので手伝ってもらったことにした。

タクちゃんが帰ってくる。「何してるの？」と聞かれたので、「おやつの準備をしているんだよ」と答えた。タクちゃんの方から声をかけてくれたのは初めてだった。ユッコとユイが楽しそうにあんこで遊んでいるのを見て、タクちゃんも近くまで来て

ボウルを覗き込む。「これなあに？」と聞かれたので「あんこだよ」と答える。するとタクちゃんは「じゃあちょっと味見」と言いながらボウルに指を入れようとする。「あんに触るのは手を洗ってからだよ」と言うのと、「じゃあタクも手伝ってあげる」と言って手を洗いに行き、人指し指の爪位の小さなお団子を作って、満足そうにしている。「上手にできたね」と言うのと、タクちゃんは「うん。でも、もう疲れたよ」と言って他のところへ行ってしまった。

好奇心は旺盛で、周りの子どもたちが楽しそうにしているとそれを共有したいという気持ちはあるようだ。しかし思っていたほど面白くなかったり、それ以上の興味をかき立てられなかったりすると、すぐに関心を失ってしまうような一面もあるようにみえる。

4月16日（金）

1年生が大分学童に慣れてきて、元気のよさに磨きがかかっていた。一方タクちゃんは1年生を避けて、ひとりで大好きなシャベルを持って公園の砂場へ行き、遊んでいた。新しい環境にはまだ馴染めていないようだ。先月まではおやつのときは自分の班の机についていられたが、今日は班からはなれ大ちゃんと2人で座っていた。少し落ち着きが無いように思えた。慣れるまでにはもう少し時間がかかりそうな様子だ。大ちゃんも「障害のない子にする以上に待つことは多いし、時間もかかるのよ。でも待っていてあげれば自分で乗り越えられるんです」とおっしゃっていた。

延長保育の時間になって（タクちゃんの帰ったあと）1年生

のサイカが難しい顔をしてやって来て、「タクちゃんは どうして わかくさなの？ わかくさの子は ずっと わかくさなの？」と言った。外見上障害のない子と全く変わらず、障害も比較的軽いタクちゃんが、サイカにはなぜわかくさにいるのか分からないようだった。わかくさの子が他の子とどこが違うのかは分からないが、どこかが違うと感じてはいるようだ。「タクちゃんとか、わかくさの子はね、みんなより少しゆっくりお勉強しているんだよ。少しゆっくりだけど、みんなと変わらない、お友だちだよ」と答えたが、この答え方が妥当かどうかは疑問であった。

職員さんに相談してみると、「その子にどこが違うと思うのか聞いてみて、一緒に考えてみたらどうでしょう」と答えてくださった。サイカが疑問に思ったのには何か理由があるのだろうか。なぜ疑問に思ったのかが分かれば、子どもたちが「障害」というものをどう捉えているか分かるかもしれないし、障害のある子とない子がうまくかわっていくための糸口がみつかるかもしれない。

4月23日（水）

今日は映画会と4月のお誕生会。映画は子どもたちの大好きなドラえもんである。しかしタクちゃんはまだ新しい環境に馴染めていないらしく、大好きな映画（タクちゃんは動く映像が好き）にもかかわらず後ろのほうで大ちゃんと並んで座っていた。面白い場面では笑っていたが、映画とタクちゃんの一対一の世界で、映画の最中も終わったあとでも誰かと笑いを共有しようとする姿は見られなかった。

お誕生会は班ごとに座って行われた。タクちゃんはやはり班

の自分の席に座ることを拒んでいたが、大ちゃんに説得されてしぶしぶ席についた。タクちゃんが班に入れたのは4月に入ってから初めてであった。やや落ちつかない様子だったが、おやつ時間も班の机についていることができた。

5月12日（水）

今日は少し離れたところにある、第2学童クラブとの交流会ということ、第2学童まで出掛けて、遊んだ。保育園時代の友だち同士が多いようで、どの子も比較的早く打ち解けていた。タクちゃんは昨年度の交流会で仲良くなったという友だちとタイヤブランコで遊んでいた。二人がどのようにして仲良くなったかはよく分からないが、子ども同士の間に「障害」の有無は関係ないようだった。障害のある子とない子がお互いをどのように受け入れていくのか、どうかかわらせればいいのか、障害のない子に障害をどのように教えるのか、などという、おとな側の考えなんて、子どもには必要のないものなのかもしれない。大事なものは一緒に遊べて楽しいということなのであろう。

6月16日（水）

教育実習を終えて、久しぶりに学童へ行った。7月のお泊まり会に向けて班替えをしたらしいが、タクちゃんに4月のような拒否反応は無かったそう。ただ、「お泊まり会」と聞くと昨年のことを思い出すらしく「イヤダ」と言って逃げてしまうらしい。これからお泊まり会の準備が始まるが、タクちゃんは参加できるだろうか。

6月25日（金）

タクちゃんがテーブルのところで、また黒い折り紙に絵を描

いている。同じテーブルで1年生の子が4、5人折り紙をしている。「何描いてるの?」と尋ねるとタクちゃんは「これはねえ、ヤミルン」と答えた。「ヤミルンって何?」と聞くと「ヤミルンルンはね、暗いところにいるの。光に当たるとねえ、溶けちゃうんだよ。だからねえ、明るい所にはいられないの」と言う。どうやらタクちゃんの空想世界のキャラクターらしい。

タクちゃんの話に折り紙をしていた1年生が興味を示しはじめ。1年生のシユウ君が「ヤミルンルンかわいいね」と言う、タクちゃんは嬉しかったのか、さらに話を続けた。「そうだよ。ヤミルンルンかわいいの。でもねえ銀色マンが来るとやられちゃうの」「銀色マンにやられちゃうってことは、ヤミルンルンは悪い奴なの?」と私が聞くと、「ううん、ヤミルンルンはかわいいんだよ」と言う。1年生のマリちゃんが「じゃあ銀色マンが悪いの?」と言うと、「違うよ。銀色マンはね、ピカピカしてるからね、ヤミルンルンはやられちゃうんだよ」と答えた。銀色マンに関してはいま一つ納得できなかったが、ともあれ1年生はタクちゃんの話に興味津々だった。1年生の方からタクちゃんにかかわったのを見たのは初めてだった。

7月9日(金)

最近子どもたちの間でカナブン捕りがブームであるようだ。特に3年生のマコトとアキオ、タロウの3人はカナブン捕りの名人らしい。虫博士のマコトはカナブンを大事に飼い、下級生にカナブンの捕まえ方なども教えてやっていたが、いたずら好きで暴れん坊のアキオとタロウは部屋の中でカナブンを投げて、カナブンが飛ぶのを見る、というカナブンにとっても、周囲に

とっても迷惑な遊び方をした。カナブンがかわいそうだからやめなさい、と言っても聞く耳を持たず、虫嫌いの子が泣きだす始末である。

タクちゃんも虫嫌いの一人である。はじめは、飛んでくるカナブンから逃げていたが、そのうちにアキオとタロウからも逃げるようになった。アキオとタロウは面白がってタクちゃんを追いつめ、タクちゃんは「やめて!」と叫びながら必死に逃げ回った。タロウは何かにつけてタクちゃんのそばに行き、「カナブンだぞ!」と言って脅かした。タクちゃんは1日中、虫とタロウに怯えていた。力も強く、背も高く、知恵もそこそこあるタロウに対して、タクちゃんのできることは「やめて!」と言いつつ逃げ回ることのみであった。

7月14日(水)

今月21、22日のお泊まり会に向け、準備が進んでいる。今日は、先月から教えて3回目のお泊まり会教室の日だ。子どもたちが係に分かれ、それぞれ準備を進める中、タクちゃんは一人、みんなから離れた所にいた。タクちゃんは職員さんが「お泊まり会」と言っただけで「いやだ!」と言って逃げてしまいうらしい。何でも昨年のお泊まり会は「お家に帰る」と言っただけで1日目の昼間から夜遅くまで泣いてばかりいたそう。しかし今年ももう2年生、お泊まり会も2回目である。楽しい思い出を作って帰ってきてくれるといいが。

7月23日(金)

お泊まり会の疲れか、子どもたちはややぐったりとしているが、「お泊まり会どうだった?」と聞くと、楽しそうに話してく

れた。小学校低学年の児童にとって、保護者からはなれての1泊2日は大冒険であろう。みんなとても楽しめたようだった。

タクちゃんに「お泊まり会どうだった?」と聞いたが、何も答えない。横にいたタロウが「途中で雷が鳴ってさあ、タク大泣きしたんだぜ。雷も怖いんだって。すげえ弱虫だよな」と、大きな声で言った。タクちゃんはとても悔しそうな顔をしたが、何と言いつ返せばよいかわからない。「誰だって苦手なものはあるんだから、そんな風に言っちゃだめだよ」と言うと、タロウは「でも俺雷は怖くないよ」と言って逃げてしまった。タロウが行ってしまってからタクちゃんに「雷怖いのか?」と聞いた。タクちゃんは「雷、怖くないもん、嫌いなんだもん」と言った。タロウにからかわれて、雷が「怖い」ことが恥ずかしく思えたのだろうか。

タロウとアキオはタクちゃんの傍を通るとき、いつも「ゴロゴロ!」と言った。タロウと同じ班のタクちゃんは、おやつの時間また班のところに座れなくなってしまった。女の子たちがタクちゃんの雷に対する怖がりぶりはすごかった、と教えてくれた。そのうちの一人、3年生のアカネちゃんが「でも、あんな風にゴロゴロとか、怖いもののこと言われて、タクちゃんとかわいそうだよ」と言った。

8月4日(水)

夏休み中はお昼寝の時間がある。これまでタクちゃんはいつも一人で寝ていたが、この日友だちと並んで寝たのである。シユウくんをアロンくんという1年生の男の子たちだ。シユウくんは友だちのいいところを見つけるのが得意で、いじわるをさ

れても上手くかわせてしまうような強さを持っている子だ。アロンくんは父親が外国人で見た目が外国人風であるせいか、他の子どもたちから弾かれてしまうようなところがある。シユウくんがアロンくんとタクちゃんに声を掛けてくれたようだ。シユウくんにとっては障害があることも、肌や髪の色が違うことも関係ないのだった。人間同士の付き合いとはこういうものなのだろう。

8月31日(火)

今日は8月最初の全員出席日。夏休み最後の日ということもあり、8月のお誕生会を含めて、お楽しみ会が行われた。午前中、お泊まり会のビデオを見て、お昼ごはんもいつもはお弁当の所を今日はみんなで作って食べた。午後からは学童のすぐそばにある公園で全体遊びをし、さらにスイカ割りをしておやつにした後、学童に戻ってお誕生会をして解散した。

ビデオを見ると、タクちゃんは大ちゃんからはなれて、シユウくんとアロンくんと並んで前のほうで見ていた。ビデオには2日目の雷雨の様子と雷に怯えているタクちゃんの表情も写されており、子どもたちは「タク怖がりすぎだよ」などと言っていた。タクちゃんは恥ずかしそうにしていたが、タロウやアキオにからかわれているときは違い逃げてなかった。子どもたちが、ビデオの全ての場面で口々に言う感想のひとつとしてタクちゃんの雷のときのことを言っただけで、すぐに次の場面に興味をそれたことや、今日の全体的な楽しい雰囲気、何より自分ことを受け入れてくれる友だちがそばにすることがタクちゃんを強くしたのかもしれない。

午後の全体遊びのとき、タクちゃんは前半は参加していたが、後半は暑さのせいか、学童に戻ってしまっていた。私と同じチームにいたイズミが、後半の途中で転んでしまったため、手当てをするために学童に連れていくと、タクちゃんが駆け寄ってきた。「どうしたの？」とタクちゃんに聞かれて、イズミは私の顔を見た。イズミはタクちゃんと同じ2年生だが、これまであまりタクちゃんと話したことがないらしかった。「どうしたの？って聞かれてるよ」と促すと、「転んじゃったの」とイズミは小さな声で言った。タクちゃんは救急箱からバンドエイドを出してきて、「血、出てるここに貼りなよ」とイズミに渡してくれた。イズミは明らかに戸惑った様子で、いつもはニコニコしている子なのだが、珍しく表情を無くしていた。私がタクちゃんにお礼を言ったあと、イズミも思い出したように「ありがとう」と言った。表情はないままだった。

手当てを終えて、みんなのところに戻る途中で、イズミは「タクに話しかけられたの初めてだよ。びっくりした」と言った。「どうしてお話したことなかったの？」と聞くと「わかんないけど。男の子とあんまり話さないし、タクと一緒に遊んだこともあんまりないから」と答えた。

タクちゃんは今月お誕生日を迎えていた。8月生まれば2人だけで、タクちゃんと1年生のタカユキだけだった。お誕生会では毎月職員さん手作りのカードとキャンディーレイというお菓子の首飾りが、その月お祝いされる子にプレゼントされる。プレゼントを手渡すのは子どもたちの中でプレゼントを渡したい子が立候補し、その中でお祝いされる側の子に指名された子で

ある。タカユキの時は1年生のほとんど2、3年の男の子が立候補したが、タクちゃんのときに立候補したのはシュウくんただ1人であった。タロウが「なんだよシュウはタクなんかに渡したいのか？」とヤジを飛ばした。しかしシュウくんは「うん。だって仲良しだもん」という一言でみんなを黙らせた。シュウくんはタロウに対して、怒ったふうでもなく、タロウのことばを意地悪ともとっていないようだった。タクちゃんはいいい友だちに恵まれた。

9月13日（月）

テーブルでタクちゃんが工作をしている。同じテーブルでシュウくんも1年生のナツミが折り紙をしている。ナツミは1年生ながら人にものを教えるのが好きで、今日もシュウくんにいろいろな飛行機の折り方を教えていた。

ナツミはシュウくん「こうするのよ、下手くそね」と厳しく指導していたが、シュウくんは下手くそなどといった厳しい発言がとぶたびに、ナツミが嫌な思いをしないですむような言葉で返していた。さすがシュウくんである。

タクちゃんは、段ボールに色を塗ったり、切ったり貼ったりして何やら一生懸命作っている。できあがった作品は平面で、B4程度の大きさである。できあがった作品で遊ぶことはなく、片付けをするとそのまま大ちゃんと大好きなシャベルを持って公園に行ってしまった。

10月22日（金）

テーブルでタクちゃんが工作をしている。折り紙を切り貼りし、どうやら立体のものを作っているらしかった。タクちゃん

は手先が器用で前々から工作は得意であったが、立体のものを作ったのは今日が初めてである。なに作ってるの?と聞くと、「これはね(と、少し考える)メカメカ・ネズミロボ」と言った。「ネズミロボ」と命名してから作品の頭部にネズミの耳と思われる丸く切った折り紙を貼り、顔を描いてでき上がりを見せてくれた。「あのね、リモコンで動くんだよ」と言うと、タクちゃんはそのすごい速さで、もちろん下書きもなしで、テレビゲームのコントローラーのような形を折り紙で切り抜いて作り、それに操作ボタンを描いて「これがリモコン」と言った。

タクちゃんは「動かしてあげる」と言い、「リモコン」のボタンを押して「ピピッ」と言いながら「ネズミロボ」を手で動かした。「面白いね。私にもやらせて」と言うとタクちゃんはリモコンを私に貸してくれた。「ネズミロボ、前へ進め」などと言いながらボタンを押すとタクちゃんが「ピピッ」と言いながら、ネズミロボを動かしてくれた。シュウくんがやってきて、タクちゃんに声を掛けると私にしたのと同じようにタクちゃんはシュウくんもネズミロボで遊んだ。タクちゃんはその日1日中ネズミロボを持ち歩き、ネズミロボで遊んでいた。タクちゃんが自分の作った作品でこれほど長く遊んでいたのは初めてであったし、作品を通して他の人とかかわったのも初めてのことであった。

10月29日(金)

学童に行くときタクウが怖い顔をしてタクちゃんを睨んでいた。タクウにどうしたのか聞いたが、「べつに」と言うだけで何があったのかはよく分からない。職員さん方も何があったのかは分からないうちに、特に気にも掛けていらいしなかった。タ

クちゃんにどうしたのか聞いたが、何も答えてはくれず、ただタクウを怯えたような顔で見ている。

今日は1日中、タクウはタクちゃんの近くを通るたびに怖い顔をし、タクちゃんは迷惑そうな顔をしつつ何も反論できずにいた。タクウがなぜタクちゃんを睨むのかよく分からず、気に掛けてみていたがタクちゃんが睨まれる理由があるようには見えなかった。タクウと話してみることにした。

「今日は機嫌が悪いの?」と聞くとタクウは「べつに」と言った。「何だかタクちゃんの横を通るときタクちゃんのことを怖い顔で見てるけど、タクちゃんに何かされたの?」と聞くと「だってあいつ、俺のこと怖がるんだもん。ムカツク」とタクウは言った。「怖がられちゃうのにあんなに怖い顔をしてみせたら、もっと怖がられちゃうよ」と言うと、「だってあいつ怖がるんだもん。おもしろいじゃん」と、タクウは言った。面白がってタクちゃんをからかっていたようだ。「でもさ、タクちゃんの気持ちになって考えてごらんよ。怖がられちゃうのが嫌ならタクウの優しいところを見せてあげなよ」と言ったが「俺べつに怖くないもん。タクが俺のこと怖がってても俺べつに嫌じゃないもん」と言われてしまう。

タクウはいくらがすぎる傾向もあるが、根は優しく、頭もいい子だ。3人兄弟の長男で弟妹らしいの面もあることを知っている。家庭ではそれほどいいお兄ちゃんなのにどうして学童ではタクちゃんも含めて下級生に意地悪をしてしまうのだろうか。これはタクウに限らず、この学童に通う3年生の男の子たちの多くにあてはまる問題であるように思うが、私に何がで

きるかは正直分からなかった。

11月10日（水）

1年生のユリとマリちゃんに連れられて公園に行き、一緒に遊んでいるとタクちゃんと1年生のアロンくんとコウキの3人の電車がやって来た。3人は長いひもで作った輪のなかに入って電車ごっこをしているのだった。「乗りたい人、乗せてあげる」とアロンくんが言ったので、ユリとマリちゃんと一緒に乗せてもらい、「箱プランコ駅」に行った。箱プランコは4人乗りだがアロンくんとコウキがこいで、タクちゃんとユリとマリちゃんが座って、5人で仲良く遊んでいた。タクちゃんが子どもたちのなかで遊ぶとき必ず一緒にいてくれていたシュウくんが今日は一緒にいなかった。シュウくんの側には一緒にいてあげているという気持ちにはもちろんなかったのだが、シュウくんがいてくれないのに4人もの友だちと仲良く遊んでいるタクちゃんに成長を感じた。タクちゃん担当の職員さんの一人である谷ちゃんは最近仲間から外れがちな子がタクちゃんのとこにきて一緒に遊んでいることが多いと教えてくださった。コウキはやや乱暴で、言葉よりも先に手が出てしまう。外国人で肌の色が違う。タクちゃんは差別をされることはあっても差別という概念がないらしく、コウキのこともアロンくんのこともあるがままに受け入れ、認めていた。シュウくんがタクちゃんにしたのとおなじようにタクちゃんも友だちを作ったのである。

11月12日（金）

タクちゃんがテーブルで工作をしている。前回のネズミロボ

同様、立体のようだ。なに作ってるの？というところ「002（ゼロ二）ごうだよ」と答えた。タクちゃんは完成した002ごうを説明しながら見せてくれた。頭にはリボンが付いており、目にはまつげが生えている。「002ごうは女の子なの」と、タクちゃんは言った。ネズミロボと同じようにリモコンで動くらしい。「これがリモコン。お腹にもボタンがあるの」と言われて、私は002ごうのお腹を見たが、ボタンらしきものは付いていない。「ボタンなんてないよ」と私が言うところ、「お腹が開くんだよ」とタクちゃんは言い、002ごうのお腹をずらした。お腹のボタンはカバー付きなのであった。タクちゃんの器用さに改めて驚かされた。タクちゃんに002ごうの写真を撮らせてほしいと頼むと、タクちゃんは喜んで002ごうを貸してくれた。「美人にとつてね」とタクちゃんは言った。作品に愛着があるらしい。

育成室で写真を撮っているとタロウと3、4人の男の子たちが自分たちも写してほしいと言ってきた。タクちゃんがそれに便乗して一緒にカメラに納まろうとすると、タロウがすごい剣幕で「おまえ、どっかいけよ！」と怒鳴った。「いいじゃん。タクちゃんも一緒に写真撮ろうよ」と私が言うとタロウが「嫌だ。そいつ（タクちゃん）とは写りたくない」と言った。タクちゃんはいきなりしてその場を離れると見せたが、写真を撮る瞬間にカメラのフレーム内に入り、タロウたちの後ろでピースサインをした。それを見てタロウは怒り、タクちゃんを追い回した。タクちゃんは逃げながら、いろいろな職員さんに声を掛け「タロウくん悪い。タロウくんのこと怒って」と触れ回った。そ

れを見てタロウはますます怒った。職員さんがタロウに何があったのかを尋ねた。タロウは半ベソをかきながら、「俺たちだけで写真撮って欲しかったのに、タクが後ろに入った。入るなって言ったのに入った」と言った。タクちゃんは「タクのこと仲間外れにした。タロウくん悪い。怒って」と言い、大ちゃんの後ろに隠れた。職員さんは取るに足らないケンカと判断し、特にどちらを罰することもしなかった。タクちゃんはタロウが怖くて泣きだしてしまっただが、今度はタロウの負けのような気がした。形はどうあれタクちゃんはタロウに反撃する術をみだしたのだった。

3、ケーススタディーのまとめ

今回ケーススタディーを通して、卒業研究という枠以外で、とても多くのことを学んだように思う。やはり子どもたちは偉大な教師だと思った。

ケーススタディーの目的は、子どもたちが特殊学級通級児童である「タクちゃん」とどのように関係を作っていくか、「タクちゃん」をどのように受け入れていくのか、子どもたちが「障害」をどのように捉えていくかを研究・観察することであった。

まず関係の作り方であるが、これは障害のある人もない人も同じであると同様。タクちゃんの場合は「わかくさの子」であることが周りの子どもたちと関係を作る上で障害となっていると思う。しかしシュウくんのような障害などによって偏見を持たない子が近くにいたことで、タクちゃんのことを知ろうとする子どもが増えたと思う。偏見を持たず、あるがままに

受け入れてくれる。そういう友だちが一人できると交友関係は広まっていく。友だちがいる、ということがある種の自信になっていく。これはおとなも子どもも、障害のある人もない人も、同じである。お互いの個性があるがままに受け入れ、認め合えた時、友だち関係は成立するのである。子どもたちは「わかくさの子」を「みんなと違う子」と言っていた。差別をしたり、障害者を避けたりすることとは違う次元で、子どもたちは障害をどこが皆と違うこと、と捉えていた。これを差別意識に変換してしまうか、個人差の一つと見ていけるようになるかは周囲の大人の対応で決まってしまう。障害のある子も、障害のない子も自分の力で発達していける可能性を持っている。この可能性は人と人とのかわり合いの中でこそ生きるものである。障害を持つ人の本当の障害となっているものは、人とかかわる機会が奪われてしまいがちであるという面にあるのかもしれない。

終章・考察

この論文はコミュニケーションの発達と障害についての理解と、障害のある子どもとない子どもがどのように関係を作っていくのか、その上で大切なことは何かを調査・研究することを目的とし、①コミュニケーション障害は何が原因でどんなものなのか、②コミュニケーションはどのように発達していくのか、③子どもはコミュニケーション機能に障害を持つ子どもをどのように受け入れていくのか、を中心に研究をした。①、②については主に文献で、③についてはケーススタディーによって調査した。

ケーススタディー法をとったことで、正直大変な苦勞をしたと思う。文献調査のみで論文を書いていれば、もっと早く資料集めも終えて、執筆に取りかかれただろう。子どもを一度に3人もおぶらされることも、子どもに肩車をしてほしいと無理な要求をされ無力感を味わうことも、半持病とも言える腰痛を悪化させることもなかったであろう。しかしケーススタディー法を取ったからこそ私は子どもの力に驚かされ、人間関係の作られ方を改めて学ぶことができ、何より楽しく研究を進めることができた。

この研究を通して私が感じたことはコミュニケーション障害にかかわらず、障害を理解しようとするなら、本の上での知識ももちろん必要であるが、実際に障害のある人とかかわってみるこそが一番の近道になるだろうということだった。大切なのはその人とコミュニケーションを取りたいという意欲と、愛情を持ってお互いを理解しようとする姿勢、お互いの個性を認め合いその人そのものを受け入れていくことであると思う。

コミュニケーション障害について、私なりの研究結果として、以下のようにまとめる。

- (1) コミュニケーション障害は器質的、機能的要因により生ずる。
- (2) コミュニケーションは周囲の年長者、とりわけ養育者との愛情を基盤にした信頼関係に基づいて発達する。
- (3) コミュニケーション機能に問題を持つ子どもも障害のない子どももお互いありのままに受け止め、個性を認め合えたとき、友だち関係は成立する。
- (4) 子ども同士のあいだで、障害を持つ子を受け入れられる子が

一人でもいれば、その子との関係を基礎に子どもは交友関係を広めていくことができる。

(5) 障害があるとかないとか、男の子だからとか女の子だからとかで、自分のなかで区別するのではなく、お互いを一人の人間として認め、向き合ってはじめて、人と人との関係は作られる。それが相手を理解する第一歩である。

障害のある子どもは障害のない子どもに比べると、発達が遅れがちである。しかしそれは「遅れている」というだけであって、発達が止まってしまっているわけではない。人間は生涯発達しつづけるものである。私は将来、障害児教育に携わっていきたいと考えている。子どものペースを理解し、子どもとともに発達していけるようなおとなでありたいと思っている。

(注・参考文献省略)